

かさこ母が語る、かさこの子ども時代

取材・執筆：家族思い出記録ライター 鮎美紀

おとなしく弱虫だった幼少期

横浜市鶴見区に住んでいた当時、私も仕事がありましたので、息子は2歳2か月の時から保育園に預けました。最初の1か月は「おうち、おうち」と言って、泣いてばかりでした。早生まれなので他の子に比べて身体も小さく、やられてしまうこともあり、おとなしく弱虫でした。

どちらかというとお父さんっ子で、週末には父親と野毛山動物園や蒲田のタイヤ公園などによく遊びに行っていました。動物園に行く度にぬいぐるみを買ってもらってくるので、家にはかなりの数のぬいぐるみがありましたよ。ミニカーも好きで、30台ぐらいは持っていたと思います。「消防車、救急車…」とか言いながら、畳の上に一台一台、きれいに几帳面に並べて遊んでいました。

電車・ファミコンにはまった小学生時代

小学生になってからは電車も好きになり、最初はプラレール、その後はNゲージに移行し、トンネルや遮断機を黙々と繋げては遊んでいました。そうしたおもちゃは、私も買っていましたし、私の母が鶴見を訪ねて来て子どもたちの面倒を見るときに、買ってやったりしていました。電車への興味から時刻表を見ることも好きになり、小学校5年生の時には、友達と鶴見線に乗って旅するような冒険もしていました。

息子と次男とは5歳離れていますので、最初は弟のことを別の生き物みたいに思っていたと思いますが、小学生ぐらいになると並んで一緒にファミコンをしたりしていました。息子は、興味を持つと、とことん突き詰めるタイプで、ファミコンも攻略法などを雑誌に応募して名前が載ることもありました。

小学3年生ぐらいから小児ぜんそくの発作を頻繁におこし、入院することもあったので心配しました。夜中に息苦しくて眠れないというので、私も少しでも楽になるように足裏のツボを押してやったりしました。一方で、身体を動かすことは大好きで、学校から帰ると社宅の敷地内の遊具や砂場で遊んだり、友達と泥刑をしたり、元気に走り回っていました。

「静岡から鶴見へ一人旅」事件

夏休みは毎年、私の実家の静岡に1か月ほど息子と次男を預けていました。子どもたちは「退屈だ」と文句を言っていたのですが、私たちが聞き流していたのですね。そうした

ら、息子が3年生の夏のこと。週末の午前中、鶴見の自宅の呼び鈴が鳴るのでドアを開けたら、静岡にいるはずの息子が立っていてびっくりしました。おばあちゃんの財布から1万円を拝借して、バスで静岡駅まで行って、新幹線に乗って新横浜に来て、横浜線で鶴見に来て。結局自宅まで一人で帰って来たのです。昔から、ここぞと決めたときは、思い切ったことをする子でした。

家族の思い出は旅行とカラオケ

私たち夫婦は旅行好きで、年2~3回は家族旅行をしていました。夏には何度か浜名湖へ行き、アサリ拾いをしたり船を借りて遊んだりしました。他にも、飛騨高山、湯布院の地獄谷巡り、鎌倉、箱根など、あちこち行きましたね。旅行の道中には、家族で漢字ゲームや数字ゲームをして、電車の中でも私たち家族だけが妙に盛り上がっていました。次男以外の3人は読書が好きで、旅行中もそれぞれ好きな本を持って行っていました。

私は中島みゆき、さだまさし、長淵剛といった音楽が好きで、テープやCDをよく聴いていました。息子と一緒に聴いていたという感覚はありませんが、影響を与えたかもしれません。高校生ぐらいまで「家族カラオケ」にもよく行って、息子は次男とチャゲ&飛鳥の「YAHYAHYAH」などを熱唱していたのを覚えています。

上福岡市への転校と高校受験

鶴見にいた時は、クラスで中ぐらいの成績だった息子ですが、小学6年生で埼玉県上福岡市に引っ越したら、急に「できる子」になってしまいました。それで本人の気持ちがノッてきたのだと思います。私が評判を聞いて通わせた個人塾がとても良い塾で、先生が川越に移ってから通い続けました。中学の同級生で同じ塾に通う仲間が何人かいて楽しかったようですし、友達同士で刺激しあって、とても良い影響を受けたと思います。中学の最初のテストの前には、私に「中間テストってどうやって勉強するの?」と聞いてきましたので、「範囲を決めて、計画的に勉強してみたら?」とアドバイスすると素直に実行していました。

息子の勉強姿で忘れられないのは、冬でも「暖房は眠くなるからつけない」と言って、頑なにそれを守っていたことです。父親のガウンを着て、アニマルスリッパを履いて、指なしの手袋をはめて。「暖房ぐらいつけたら?」と言っても聞くような子ではなく、とてもストイックでしたね。勉強のスケジュールも自分で決めていて、22時が休憩の時間なので。その時間になると、コーヒーを入れてポテトチップスを食べながら、ニュースステーションを見るのが日課でした。私も議論好きですので、二人であれこれ議論しました。

新聞熟読とノートが今につながる?

高校に入ってからは、先生に「新聞は毎日読め」と言われたようで、家族の誰よりも丹念に、隅々まで新聞を読んでいました（※かきこ注：本人新聞を読んだ記憶なし）。毎日ノートに感想か何かを書き込んでいて、それが今のブログ更新につながっているのかもしれませんが。

大学受験に関しては、親の勝手な思い込みから「国立大学じゃないとね」と言っていたため、国立大学をめざし勉強していました。ある時、「中央大学はマークテストらしいわよ。受けてみたら？」と言ったら、「なんだ。国立じゃなくて良いんだ」と言って、直前になって受験校を変えていました。親の見栄と欲から、国立大学に固執していた責任を今でも痛感しています。

息子は、ずば抜けて何かができるという子ではありませんでしたが、しいて言うなら、決めたことをコツコツと、過程を踏んで進めていくのは得意かもしれません。就職してから営業成績が良かったのも、「戦略を立ててまじめにコツコツ努力をしたら、結果がついてくる」ということがわかっていたからではないでしょうか。

理屈で納得しないと動かない子

息子は、自分というものがしっかりあって、相手を気遣って妥協したり自分の意志を変えたりということがありません。もしかすると少し冷たく映るかもしれませんね。「常識だから」「親の言うことだから」という理屈だけでは動かない子で、「納得したことはする、納得できないことは絶対にしない」という基準がとてはつきりしていました。私が買った洋服でも、「モノトーン以外着ない」とか言って、気に入らなければ絶対に着ないのです。

詳しい経緯は忘れましたが、父親と議論していた息子が、納得できないことがあったのか、腹を立てて家の壁を殴り、穴を開けたこともありました。

教育方針について、当時は私たちも何かを軸に子育てをしていたはずですが、実は思い出せません。ただ、私は「自分がされて嫌なことは人にしない」と心得ていて、それを伝えてきたつもりです。

息子が父親になって見せた顔

最近、息子には年に数回しか会えませんが、夫婦に待望の子どもが生まれて、やはり息子は変わったと思います。あきれぐらい子どもにのめり込んでいますよ。あれほど感情を表に出さなかった息子が、自分の娘にベツタリで、「唐揚げが好きだから」と、せっせと唐揚げを細かくちぎってあげたりして。相手を気遣う素振りを見せることがない子だったので、子どもができて相手を気遣うことができるようになったのか、あるいは、子どもを通じて、気遣う姿を表に出せるようになったのか。いずれにしても、人の親になったのだなと思います。今は、仕事以外の安らぎを得たことで、仕事も家庭も、父としても夫とし

でも充実しているようで安心しています。

母より、息子へ

以前は、私もオフ会の手伝いをしたり、セルフマガジンをどこに配布しようかと考えたり、売れない演歌歌手を応援するような気持でした。とにかく一人でも多くの人に息子の活動を知ってもらいたいという、その一点でした。

最近では私にはあまり声がかからなくなり、一人で何でもこなしている姿に、ほっとしています。「もう大丈夫」。好きなことを見つけて、果敢に挑戦し精力的に活動しているようで、次は何をするのか今後も楽しみです。

ただ、息子ももう若くないので、重いカメラを背負って日本全国を動き回るのは大変だと思います。とにかく体を大事に。親として願うのはそれだけです。